

## コースの一部で使う文学作品と映画

# Incorporating Literature and Film into a Non-literary Course

久世 恭子

東洋大学

Kyoko KUZE

Toyo University

### Abstract

The primary aim of this paper is to examine the role of literature and its film adaptations incorporated into a non-literary course in a Japanese university EFL class. The paper first describes how George Bernard Shaw's *Pygmalion* and its films were introduced into the course, in which students primarily read a book titled *Language Myths*—a collection of essays on sociolinguistic issues written by linguists. After discussing classroom activities, the paper presents an example of student writing that predicts a sequel to *Pygmalion*. Next, it analyses, based on data from questionnaires, student responses both to those literary materials and to the related activities. The findings suggest that literature and film used even in a part of the course can provide students with enjoyable and creative learning experiences. They can also help deepen students' understanding of facts learned from information-based texts and help students better assimilate knowledge. In conclusion, this study shows that literary materials can be effectively incorporated into a non-literary course and that there seem to be some exclusive benefits of the use of literature and film with texts of the other type.

### 1. はじめに

第二言語・外国語教育を含めた言語教育で文学作品を利用する研究は、1980年以降の教育的文体論の発展をきっかけに、主に英米で進められてきた。日本においても、どのような作品をどう使うかという研究から、実際の授業ではどのような活動が行われ学習者はどう反応するかという実践データの収集まで様々な研究が積み重ねられてきた。しかしながら、文学教材を使うことには一定の意味があると認められる一方で、学期を通して文学作品を使用するのは大学を含めた英語教育全般で難しい状況となっている。

そこで、本論では、1学期のコースの一部で文学教材を使用する可能性を議論したいと考えている。研究課題として、「文学テキストを主教材としない大学英語授業のコースで、限定的に複数回、文学

作品や映画をその特徴を活かして使うにはどのような授業デザインが考えられるか、そして、そのように文学的教材を使う場合の利点はどのようなものか」という問いを設定し、実際の授業実践の方法と学習者の反応の分析から、コースの一部で使う文学作品と映画の意義や役割を探る<sup>1</sup>。

## 2. 研究の背景

### 2.1 文学テキストや映画を使う意義と課題

英語教育で文学を利用する研究は、Widdowson (1975)が文学ディスコースを言語学の立場から論じる文体論を展開したことを1つのきっかけに英米を中心に進められてきた。1980年以降、文学を教材とすることの意義として、言語能力の向上、感情移入や人格形成、文化理解などが主張され (e.g., Carter & Long, 1991; Paran, 2006)、理論的な基礎が固まったが、2000年以降はそれらの主張を裏付ける実証的なデータの収集が急務とされてきた。特に、Paran (2008)は、教室における多くの実践データの記述や報告が不可欠であることを訴えている。日本でもこの流れに沿い、どのような文学作品をどう使うか示す教科書やリソースブックなどの刊行 (e.g., 斎藤・中村編, 2009; 吉村他編, 2013)、学習者の反応についての研究が進められてきてはいるものの、文学が使いやすい状況とはなっていない (Burton, 2016; Saito, 2020)。大学教育においても、英米文学や英語学を専攻する学生以外に、いわゆる一般教育の英語授業で文学作品を用いるのは多くの場合難しい。

その理由として、30年も前にHirvela (1989)が提示した「語学教師が文学を避ける5つの理由」のいくつか、すなわち、文学を狭義に解釈しcanonのような難しい作品にこだわっていること、普段からユニットに頼り過ぎており文学には準備に相当な手間がかかること、などが現在の状況にも当てはまるが、日本の英語教育固有の理由として、Saito (2020)は、文学テキストはinauthenticな教材と誤解され文法訳読法と結び付けられているという点を指摘する。それ以外にも、文学は英語の実用的なコミュニケーションに役立たないこと、大学では学生の専攻や将来の職業に関する「特定の目的のための英語」(English for specific purposes, ESP)と接点がないことなどがしばしば指摘されている。

一方、伝統的に語学教育の教材として使われてきた映画について、上述のSaito (2020)は、文学の翻案としての映画を文学テキストと共に使うことを提案する。

“In the age of audio-visual technology, where film/drama adaptations of many literature works are available, there are a great number of different ways to make use of audio-visual materials to help students understand texts they are reading.” (p. 129)

同様に、Paran & Robinson (2016)も、文学テキストの理解を促すという映画の役割について以下のように説明する。

“Because films are such an important part of popular culture, using them in the classroom can help to promote an understanding of literature and also help learners bridge any perceived gap that they feel between the two.” (p. 118)

## 2.2 英語教育の多様なコンテキストでの文学利用

文学教材の意義を信じる、あるいは英語授業で文学を使いたいと思う教員が、文学テキストを使うのが難しいという昨今の状況において、文学を前面に押し出して1学期間を通して使うのではなく、多様な状況で様々な方法で使うことを考えるのは当然の帰結と言える。例えば、これまで文学とは決して相容れないと考えられてきたESP重視の授業でも部分的に文学的な教材を取り入れることは可能である。Hirvela (1990)は、ESPにおける文学教材の位置を追究し、“The terms literature and ESP are mutually exclusive.” (p. 237)と認めた上で、ESPをバリエーションのあるものと捉える、Widdowson (1983)の見方を紹介し、ESPの目的をトレーニングから教育まで幅のあるものと見なす時には文学教材にも果たす役割があると述べている。実際に、これまで、エンジニアリング専攻の学生に小説を用いたケース (Kelly & Krishnan, 1995) や医薬系の学生に病気に関する小説・映画を用いた例 (久世, 2018)、ビジネス英語のコースで*The Remains of the Day*の映画を用いた例 (久世, 2021) などの実践報告がある。

学期を通してコース全体で使うのは難しいからという理由で「せめて」コースの一部で用いようという場合は消極的な理由によるものと呼ぶことができるが、これに対して、同様にコースの一部で使う場合でも、文学以外、たとえば情報収集を目的としたテキストを主教材としたコースにおいて、「あえて」文学テキストを限定的に加えるというケースは積極的な理由によるものと呼べるかもしれない。全体で使えないから仕方なく一部で使うのではなく、一部で使うからこそその意味や利点を見い出せる可能性もある。そのような状況で文学を単発的、限定的に使う場合にどのような実践が可能となるか、どんな利点があるかを以下、議論していく。

## 3. 研究方法

本論の研究課題に答えるために、まず、コースの一部で文学と映画を使う授業実践のデザインを提示し授業展開を記述する。そして、実際の活動の成果を紹介した後で、アンケート調査をもとに受講生の反応を分析し、このように用いられる文学と映画の意義について論じる。

### 3.1 研究対象

首都圏にある大学で筆者が2021年度春学期に担当した、選択必修の英語授業を研究対象とする。受講生は1年生28名で教養学部属するが、大学入学時に文系あるいは理系を選択しており、3年進級時に各学部に分かれるシステムになっている。受講生の英語能力は、自己申告によると、大多数が実用英語技能検定の準1級を持っていてCommon European Framework of Reference for Languages (CEFR) のB2レベルに属するが、C1レベルに該当する受講生も何名かいる。

### 3.2 授業概要

新型コロナウイルス感染防止対策の一環として学期中の全授業をオンライン(同期型)で行った。授業にはZoomを用い、教材配布、課題回収、評価などには大学のLanguage Management System (LMS)を使用した。

授業目的は、(1) 読解力向上、(2) 言語神話形成の背景にある社会問題や文化への関心の養成、(3) 内容に関連のある戯曲*Pygmalion*、映画*Pygmalion/My Fair Lady*を通して文学的な作品に触れることの3点である。

主教材はBauer & Trudgill (Eds.), *Language Myths*で、これは言語に関する21の神話(伝説)について言語学者たちが専門知識を用いて一般の人向けに解説する、論説文のコレクションである。毎週、事前に決めておいた発表者数名を中心に1つのmythを読んだ。全13回(90分)の授業のうちコース中間の連続3回を使って、George Bernard Shaw, *Pygmalion*の原作から抜粋したテキストを読解し、*Pygmalion*に基づいた映画である1938年制作の映画*Pygmalion*と1964年制作の映画*My Fair Lady*を視聴した。戯曲である*Pygmalion*の読解は、Zoomのブレイクアウト機能を用いて、各グループで配役を決め英語で読み合わせ(音読)をした後、台詞を日本語になおして再び読み合わせをした。*Pygmalion*のテキストは、プロジェクト・グーテンベルク掲載の初版とPenguin版のペーパーバックにある1916年版を使った。

### 3.3 アンケート調査

この3回の授業に対する受講生の反応を探るために、最終授業終了後にLMSのアンケート機能を用いてアンケート調査を行った。調査の目的を説明し、参加に同意する受講生のみ自由意志で参加してもらった。アンケートでは、まず、受講生の英語文学作品に対する意識調査を行い、続いて対象授業について質問をした<sup>2</sup>。分析方法は、選択式の回答は数値を示し、自由記述の部分は分析における客観性を保持するためにKH Coder<sup>3</sup>を使用した。高い頻度で出現する単語を抽出し、さらに、それぞれの重要単語の前後の文脈をコンコードダンスで調べ、その後で筆者が質的記述を行った。

## 4. 研究結果

### 4.1 授業展開

このコースでは、学期を通して主教材である*Language Myths*の各myth<sup>4</sup>を1授業時間に1つずつ読み、発表者を中心に内容理解と情報・意見交換を日本語で行うやり方で進めたが、本論で研究対象とする3回の授業の直前の授業で、Myth 20: Everyone Has an Accent Except Meを読むように設計した。英語圏におけるアクセントの基礎知識と関心を受講生に持ってもらったところで、戯曲と映画を導入したかったからである。実際、Myth 20の章末“Further Reading”のセクションでは、*Pygmalion*を読むことと映画*My Fair Lady*を観ることが強く推奨されており、それらを使った授業実践への自然な導入を可能にした。表1は連続した3回の授業の具体的な内容である。

部分的に文学作品や映画を取り入れたねらいは主に2つある。1つ目は、主教材のテキストで読んだ社会言語学の内容、特に、アクセントについての説明を、文学作品や映画を通してより深く理解し、具体的なイメージを持ってもらうことである。2つ目は、主教材が読解を目的としたテキストであったため、戯曲*Pygmalion*の読み合わせをグループで行い、映画の英語音声聴くことで、主教材を用いてほとんど行われていない音声面の活動を取り入れることである。

「授業1」では、ACT Iの抜粋部分について、言語、文法、内容の理解を確認するためのエコのクササイズを筆者が作成し、答えてもらった。視聴する映画は、台詞が戯曲のテキストに近いこと<sup>5</sup>と著作権の問題がクリアされていることから*Pygmalion*を基本とし主にYouTubeで観てもらったが、いくつかの場面では*My Fair Lady*も視聴してもらうためにmovie clipsを作成してLMSで配信した。「授業2」では、ACT III, Vの抜粋部分を「授業1」と同じように読み、2つの映画の場面をいくつか観てストーリーを最後まで把握してもらった。

表 1 授業展開

	授業 1	授業 2	授業 3
授業までの課題	Act I 抜粋の読解とエクササイズ	Act III, V 抜粋の読解	Creative writing (sequel)
授業内容	1.作品と映画の解説 2.DVD視聴(抜粋の前まで) 3.グループ活動: ACT I 抜粋を役に分かれて音読し、その後台詞を日本語で言う 4.答え合わせ(グループ、クラス) 5. DVD視聴 (ACT I 抜粋からACT III抜粋の前まで)	1.DVD視聴(抜粋の前まで) 2.グループ活動: Act IIIの音読、日本語訳 3.DVD視聴 (ACT III 抜粋～ACT V抜粋の前まで) 4.グループ活動: Act Vの音読 5.DVD視聴 (ACT V抜粋) 6.Creative writing の説明 (Guidelines, 評価)	1.Sequelの読み合わせ(グループ、クラス) 2.Shawの人生と活動について解説 3.DVD視聴 (ACT V最終場面)、グループ活動 4.Pygmalion (1916) とのendingの違いとsequelの解説 (なぜShawはendingを書き換え、sequelを加えたのか、ここに見られる文学作品の特徴とはどのようなものか、クラス全体で議論)

「授業 3」では、文学作品や映画をその特徴を活かして使うために、本編を観終わった後で各自、自分の理解と解釈に基づいてsequelを書いてもらった。原作者のBernard Shawは、1912年に初版として書いた台本の結末で主人公のElizaが誰と結婚するのか明らかにしなかったが、その後、ロンドンの舞台上で演じられた時には劇場主でもある俳優がハッピーエンドのロマンス劇とするため、Higgins教授との結婚が暗示される演出をした。現代のリアリズム演劇を信奉していたShawはこれに対抗し、1916年版ではエンディングを書き換え、かつ、長く詳細なsequelをつけたのである。短時間のうちに原作の抜粋と映画でプロットをつかんだ受講生に、Shawが書いたような壮大なsequelに匹敵するものを書いてもらうことは無理であるが、それでも読んだ部分をベースに続きを創作してもらうこととした。教育的文体論の実践でも使われる、rewriteやpredictionに似た活動である。そして、グループ毎にそれぞれの書いたsequelを共有し、最後に作者Shawが実際に書いたsequelをクラス全体で読み、なぜ、彼がそれを書かなければならなかったか、議論し筆者が解説した。ここで、文学テキストは、主教材の論説的・説明的な文章とは違い、ある範囲内とはいえ読み手に解釈の自由を与え、時には作者の意図とも異なる受け取られ方がされることを説明した。読者の側から見れば、解釈にいくつもの可能性があることになるが、この授業では、受講生それぞれがsequelを書くという答えを持たない課題に取り組み、さらにそれを共有して他者の異なる考えを知る機会を得られるようにした。

Creative writingの課題を出すに当たっては、guidelinesと手がかりを示した。図 1 で示すguidelinesは、Carter (2010), Hess (2006) を参考に作成したものであるが、これらが書く時の条件であり、また、評価のベースになることを説明した。手がかりとしては、sequelの内容を暗示するような登場人物の台詞を主にAct Vから抜き出して一覧表にして示した。

図 1 Creative writingのguidelines

**Write a sequel to *Pygmalion* in English. Predict whom Eliza will marry and how she will live after that.  
(approximately 150 - 200 words)**

- You should develop the plot naturally from the work.
- You need to consider the personality of each character.
- You need to reflect on the social and cultural backgrounds of the work.
- You can write either in prose or in drama.

#### 4.2 受講生のwriting

28人がwritingを提出し、指定の語数（150-200 words）を大幅に超えて300words以上書いた受講生が多く、中には500words以上書いた学生も数名いた。形式は、散文でも戯曲の形でもよいことにしたが、実際には13人が戯曲を選んだ。以下に、戯曲形式で書いた受講生のwritingの一部を紹介する。

##### <Scene.1 In Higgins's house>

Colonel: What will you do, then?

Don't you want to marry Eliza?

Higgins: What? Why do you think so?

She is a flower girl. I'm a scholar.

Colonel: ...I think you are a great scholar and what you achieve with Eliza is a great feat.

But you make a serious mistake.

Higgins: I look down on her? I don't.

She and I are different in the first place, and...

Colonel: No,no. Your mistake is lying to yourself. You love Eliza, don't you?

Higgins: ...I need her and I miss her. It's true, but it's not love.

Colonel: (with a sigh) If you say so, it's true for you. I cannot say anymore.

(Colonel goes out of room.)

Higgins: (murmuring) Yes... I can live without her.

#### 4.3 アンケート調査の結果

アンケートには、調査の主旨を理解し回答に同意する場合に限り回答をお願いしたところ、受講生28人中26人から回答を得た。文科系・理科系別ではそれぞれ13人ずつであった。

##### 4.3.1 文学作品を読む経験と印象

授業についての反応を調査する前に、研究対象とした受講生がこれまで英語の授業や学習の中で文学を読んできたかどうか、また、英語で文学作品を読むことを重要だと思っているかどうか、を質問した。結果をそれぞれ表2、表3で示す。

表2 英語で文学作品を読むという経験について

多く読んできた	わりと多く読んできた	どちらとも言えない	余り読んでこなかった	全く読んでこなかった
1 (3%)	8 (30%)	6 (23%)	6 (23%)	5 (19%)

読んだ作品の例：Roald Dahlの作品、Sherlock Holmesのシリーズ、Harry Potterのシリーズ、*Never Let Me Go*、*Christmas Carol*、*Anne of Green Gables*、1984

対象とする受講生の専攻が様々であることも影響しているかもしれないが、これまでの経験は非常に多様であることがわかる。

表3 英語で文学を読むことについて

重要だと思う	まあ重要だと思う	どちらとも言えない	余り重要だとは思えない	全く重要だと思わない
11 (42%)	14 (53%)	1 (3%)	0	0

(必要だと思う理由) 英語圏文化理解に役立つ (20) / 教養が身に付く (19) / 読解力が向上する (17) / 解釈をする力を養える (17) / 楽しく英語を学べる (16) / 語彙力が向上する (14) / 人間的に成長する (6) / 創造的な活動ができる (6)

(理由は選択式で複数回答可 / カッコ内は回答数)

前の質問で、文学作品を読む経験が様々であり「余り読んでこなかった」「全く読んでこなかった」と回答した受講生が合計で11人 (42%) いたにもかかわらず、ほぼ全員が英語で文学を読むことを重要だと考えていることがわかる。

#### 4.3.2 文学と映画を使った活動の印象

ここからは、研究対象とした3回の授業全体についてアンケート参加者の反応を提示する。表4は、活動についての印象とその理由を示すものである。

表4 文学と映画を使った活動の印象

良いと思う	まあ良いと思う	何とも言えない	余り良いとは言えない	良いとは言えない
18 (69%)	7 (26%)	0	1 (3%)	0

テキストや映画が興味深かった (20) / 3回の活動の意味を感じられなかった (1)  
英語圏文化の理解に役立った (16) / 英語力の向上には関係ないとする (1)  
*Language Myths*とは異なる英語の表現に触れられた (13)  
教養が身に付いた (11)  
*Language Myths*の内容を具体的に理解することができた (9)  
様々な解釈があることを学ぶことができた (5)

(理由は選択式で複数回答可 / カッコ内は回答数)

1 名を除いて受講生全員が肯定的な反応を示した。「良いと思う」とした回答が 7 割近くを占め、「まあ良いと思う」と合わせてその理由は、「テキストや映画が興味深かった」が最も多く、次いで「英語圏文化の理解に役立った」となった。

### 4.3.3 "Writing a sequel"の活動について

文学と映画を使った 3 回の授業では、最後に行った、sequelのwritingを特に文学教材の特徴を活かした活動と位置付けたので、一連の「sequelを書く」「グループで共有する」「Shawの書いたsequelを読む」という活動について受講生の反応を調査した。表 5 はその回答をまとめたものである。

表 5 "Writing a sequel"の活動について

良いと思う	まあ良いと思う	何とも言えない	余り良いとは言えない	良いとは言えない
13 (50%)	9 (34%)	2 (7%)	1 (3%)	1 (3%)

理由はコメント欄に記してもらったが、この活動は実際には 3 つの活動「書く」「共有する」「読む」を含んでいるため、様々な回答があった。KH Coderを用いてすべての回答を分析し高頻度で出現する単語を調べると、形容詞では「楽しい」が最も多く 7 回、また、似た意味を持つ単語として「興味深い」も 2 回出現している。何が楽しいのか、何が興味深いのかを調べるために、KH CoderのKWIC コンコーダンス<sup>6</sup>を用いて前後の文脈を調べた。図 2 で「楽しい」という形容詞のコンコーダンス分析を例として示す。さらに、コロケーション統計で確認すると、「書くことが楽しい」が 3 回答、「他者と共有することが楽しい」が 2 回答、「文化的な背景を知るのが楽しい」「解釈するのが楽しい」はそれぞれ 1 回答であった。同様に、「興味深い」は、「人との解釈の違いが興味深かった」「当時の解釈を知ることができ興味深かった」という回答であった。また、「解釈」という単語も上位で抽出されたが、それらは「他の人との解釈の違いを感じた」が 2 回答、「原作との解釈の違いを知ることができた」が 2 回答であり、いずれも「多彩な解釈」「解釈や想像力の多様性」という文脈で使われていた。

図 2 KWICコンコーダンスの例：「楽しい」が出現する文脈





活動について「余り良いとは言えない」「良いとは言えない」と回答した理由は得られていない。

#### 4.3.4 2つのテキストの違い

次に、*Language Myths*と*Pygmalion*の2つのテキストの違いについて自由記述をしてもらった回答を表6で紹介する。

表6 2つのテキストの違い (LM=*Language Myths*, P=*Pygmalion*)

言語表現・形式に関するもの	<ul style="list-style-type: none"> <li>➤ LMは論理的 (6) 説明的 (5) 客観的 (3) 評論的 (2)</li> <li>➤ LMは中高でたくさん読んできたタイプの文章で要旨をつかみやすかったが、Pには読みなれた説明文とは異なる難しさ (2)</li> <li>➤ Pはスラング・口語もあり、難しい (4)</li> <li>➤ Pは単語がわかっても内容理解が難しい部分がある</li> <li>➤ Pの方が修辞があり、自分の英語力・教養では及ばない英語だと実感できた</li> <li>➤ Pは文脈依存的。テキストだけでは難しく、映画で内容がわかる</li> </ul>
内容に関すること	<ul style="list-style-type: none"> <li>➤ LMは一般論を書いた説明文で、Pはその実例 (3)</li> <li>➤ LMには専門的すぎるmythがあり、理解しづらい</li> <li>➤ 前者は論文のように読者に1つの考えを説得させるものであるのに対し、後者は物語であり、様々な考えを持たせるものであると思う</li> <li>➤ Pはストーリー性があり、面白かった (3)</li> <li>➤ Pは、LMを読んだ後だからこそ理解・鑑賞することができた (2)</li> <li>➤ Pは社会への批判、登場人物の気持ちなどの要素があり、面白い (2)</li> <li>➤ Pは文化的背景も学べ、楽しかった</li> </ul>
その他	<ul style="list-style-type: none"> <li>➤ Pなどの文学作品では無味乾燥な精読に限らない英語学習ができるので楽しい</li> <li>➤ PにもLMにも、偏見や人種、地域による差別など社会的な問題が背後にある。Pは、論説文の形でなく、劇によってそれらを痛烈に批判するというのはより多くの人々に響く手段であるなど感じた</li> </ul>

(下線は本論の筆者による／カッコ内は回答数)

大多数の受講生が2つの作品について、*Language Myths*は説明的で読み手として情報を集め論理をつかみながら読んだが、*Pygmalion*はストーリーを追いながら想像を働かせて読んだと述べ、文学的なテキストとそうでないものの違いを実感していた。2つのテキストの関係について特に指摘した回答は以下の通りである。

- LMは学問的考察・研究、Pはそれがわかりやすく見てとれる例
- LMでは具体例として描写されるだけで読者側が流してしましそうな所を、Pでは深く掘り下げ鮮明に描写されているため、こちら側が理解し入り込みやすかった。また、Pでは人物描写を用いて皮肉に言語について描写している所が、LMなどの説明文を読むだけでは体験できないことを可能にして

いると思う。ただし、教養を身につけることに関しては、様々な作者の意見を同時並行で理解することが出来るLMも大切になってくると思う。

- LMのような説明文で社会言語学を学ぶと一方的に主張を聞いているだけで主張に対して違和感を持つこともあったが、Pのような文学作品は社会言語学について実例を見て自分で考えることができるので、その点が文学作品を用いた学習の利点なのではないかなと思った。
- アクセントに関しては、LMのMyth20からのPという流れがスムーズで良かったと思います。  
(下線は本論の筆者による)

*Language Myths*で読んだ客観的な説明の具体例、あるいはケーススタディとしての*Pygmalion*の捉え方が見えてくる。また、主教材の内容に関連のある文学作品を副教材として用いる場合のrelevance（関連性）についての指摘もあった。

#### 4.3.5 全体的な感想

最後に、ここまで書けなかったことやこの授業についての全体的な感想を自由に記述してもらったところ、予想以上に多くの反応があった。再度、KH Coderを用いて抽出語リストを作成し、「授業」「英語」などを除く形容詞、形容動詞を抽出すると、本授業で文学作品を扱ったことの全体的な感想を得ることができた。「楽しい」「面白い」9回答、「新鮮だ」3回答、「難しい」3回答が3回答以上あった感想である。これらの形容詞等をどのような文脈で記したのか、特に文学作品を読むことについて述べているものを以下に記す。

- 私は教科書のような堅苦しい文章よりも小説の方が好きなので、とても新鮮で楽しかったです。
- 私はここまで本格的に英語で文学作品に触れたことはなかったので、本文はなかなか難解でしたが、すごく新鮮で楽しい時間でした。
- 今まで私は中高の授業や受験勉強用の教材以外で英文を読んだことがほとんどありませんでした。そのため洋書や英語の戯曲を他の受講者の発表や映像の補助を受けながら理解できたのは新鮮な体験で、大学を卒業した後も英語の作品を趣味として楽しむきっかけになったと思います。
- *Pygmalion*がとてもおもしろかったです。もう1つくらい映画を観たかった…。
- 続きを書くという課題も面白かったです。まさか作品の著者自身が結末を補足するとは衝撃でしたが…。
- 人の意見を一定時間聞いて後にそれについて議論するというのは、言語構造や文学作品の理解のためには必要なことだと思いました。
- 楽しく学ぶことができました。有名な話だと聞いたので教養にもなったと思います。
- ピグマリオンという文学作品を読むこと自体が楽しかったし、時代背景の違いから作品の背景を考察したりすることも楽しかったです。
- 理系学生としては、こういった文学作品に触れる機会は貴重でとても楽しかったです。昔の洋画も今まであまり観たことがなかったのですが、今回観ることができお洒落で素敵だと感じました。
- 昔の英語なので理解するのがむずかしかったが、授業で取り扱っていただいたことで親しむことができ、教養が身についた。

- 教材に知らない表現が多く出てきていて難しく感じた。

(下線は本論の筆者による)

文学作品と映画を併用することについての回答は以下のとおりである。

- 実際の映像を見ながらでないと、文章だけでは場面の想起が難しいと思った。
- 戯曲本体だけではイメージがしづらかったところが、映画によって具体的なイメージを掴むことができました。
- 映像を見ることで、意味を理解できなかったセリフの雰囲気だけでも分かることがあり、助けになった。

(下線は本論の筆者による)

## 5. 考察

本論では、文学作品とその映画をコースの一部で単発的、限定的に使う際、どのような授業デザインが考えられるか、そして、そのように文学的教材を使う場合の利点は何か、という問いに答えるため、大学での連続3回の授業の展開と受講生の反応を分析した。

研究対象とした授業では、論説文を主教材とするコースにあえて戯曲と映画を取り入れたが、その際には文学的な教材の特徴を活かせるよう使い方を工夫した。文学教材を使ったのは読解以外に言語活動の幅を広げるという意図もあったが、それ以上に、日頃文学作品に触れる機会が限られている学習者たちに、テキストの特徴を認識し、文学を教材とすることで生じる楽しさや多様な解釈の可能性に気づいて欲しいというねらいがあったからである。

最初に調査した英語で文学作品を読む経験について、参加者の経験や意識は様々で、余り読んでいなかったという回答も半数近くあったが、ほぼ全員が文化理解などを理由として文学作品を読むことは重要だと感じていることがわかった。

実際に授業実践を行い学習者の反応データを収集した結果、このような限定的な使い方においてもこれまでに主張されてきた文学あるいは文学的教材の意義が観察された。多くの受講生たちはこれまで余り馴染みのなかった戯曲の読解や創造的なwriting活動に楽しいと感じながら取り組んでいた。1つの答えを求めるとはでない創造的な課題は新鮮に映ったようであるが、作者やクラスメートの考えを知ることにより、解釈の多様性や異なる考え方の存在を認識することができたと答えている。

異なる2種類のテキストと映画を合わせて使うことの利点もいくつか得られた。まず、主教材の内容に関連した文学作品を取り入れることにより、主教材と文学作品、両方の理解が深まることである。本論の授業では、主教材でアクセントについての基礎知識を得た後で、戯曲や映画でアクセント矯正の具体例を読み視聴したわけであるが、これにより主教材の学術的な説明がよく理解できたという声が多かった。同時に、主教材での説明があったおかげで戯曲テキストや映画をよく理解し関心を持つことができたという指摘もあった。主教材と文学的教材は相互補完的に使用されただけでなく、それぞれの理解を深め関心を高めるための相乗効果があったと言える。また、その際に理解が深まった内

容は、アクセントの問題にとどまらず、人種・階級・性別などに対する偏見や差別など社会的・文化的な問題を含むという感想があった。

利点の2点目は、性質の異なるテキストを使うことで幅広い言語活動が可能となるという点である。主教材では、文字通り正確に内容を読み取り要約する練習をし、*Pygmalion*では音読、精読、writing、映画でlistening活動をした。特に、sequelを書くcreative writingの活動ではwritingのためにテキストを何度も読み返したという指摘が受講生からあり、このようなwritingは読みとリンクしていることを改めて認識することとなった。ただ、本研究では言語能力の測定はしていないので、実際に能力が向上したかどうかについては示すことができない。

文学作品をもとにした映画を用いることの効果としては、先行研究でも指摘されているように、テキストの理解を助けるという点が大きい。文学作品では単語を調べただけでは文の意味や状況がつかめない場合もあるからである。また、映像があると文化理解がより深まるとの指摘があった。さらに、今回の実践でもテキストと映画の解釈の違いに興味を持ったという反応があったが、時間があれば、テキストを読んだ上で2つの映画の比較をするのも興味深い活動となるだろう。

文学を授業で用いる場合、問題となるのがrelevance（関連性）の問題である。教員が良いと思う作品でも、その授業との関連性や使う意味を伝えられなければ、学習者の関心を引き付けるのは難しい。本例の場合は主教材と内容的な結び付きが強い文学作品を利用できたのは幸運であったが、一般的には、作品選択、実践方法、時間配分などに十分な注意が払われるべきである。

## 6. おわりに

従来、英語教育における文学テキストについては使用が可能か、あるいは適切であるかという観点から議論されることが多かったが、本論ではコースの一部で利用する場合の文学的教材の可能性を論じた。文学を主教材として前面に出して使うのが難しい場合やコースの一部で使いたいという場合、作品や教材を慎重に選び使い方を工夫すれば、学習者はジャンルの異なるテキストに見られる言語的な特徴に気づき、ストーリーを追い創造的に書く楽しさを感じ、他者と意見や感想を共有し合うことで解釈の多様性を認識することができる。これまで主張されてきた文学教材の良さを十分に活かして使うことが可能となるのである。それどころか、一部で使われる文学的教材は、そうでない他のテキストや教材と言語的にも内容的にも補完し合い、双方のテキストの理解を深めたり学習者の関心を高めたりするなどの役割を担えらると思える。

最後に、英語教育における文学教材の使用は、本論で示したように、状況に応じた多様な使い方や柔軟な利用の仕方が考慮されるべきであることを強調したい。

## 注

1. 本稿は、JAILA第8回全国大会（2019年3月16日、於兵庫県立大学）において研究発表をした際の実稿がもととなっている。本稿の執筆にあたり、データを更新して内容を発展させ、大幅に加筆・修正した。
2. アンケートの設問は、文末のAppendixで示す。

3. KH Coderは、「計量テキスト分析」または「テキストマイニング」と呼ばれる方法に対応する。テキスト型（文章型）データを統計的に分析するためのフリーソフトウェアで、アンケートの自由記述・インタビュー記録・新聞記事などのデータを分析する。詳しくは、樋口 (2020)を参照されたい。
4. このテキストは、mythのコレクションなので、1つ1つのmythは通常の本の章に相当する。
5. 映画Pygmalionの脚本はShawが書いており、台詞が戯曲と類似している部分が多い。
6. KH Coderで、ある語の前後の文脈を調べるツール。KWIC=Key Word In Context

## 引用文献

- 久世恭子 (2018). 「ESP と文学テキスト：英語教育における接点を探して」 *JAILA Journal*, 4, 2-13.
- 久世恭子 (2021). 「ESP と文学的教材－『ビジネス英語』で使う文学の映画－」 *JAILA* 第9回全国大会  
プロシーディングズ.
- 斎藤兆史・中村哲子（編）(2009). *English through literature* (『文学で学ぶ英語リーディング』) 東京：研究社.
- 樋口耕一 (2020). 『社会調査のための計量テキスト分析－内容分析の継承と発展を目指して』(第2版)  
京都：ナカニシヤ出版.
- 吉村俊子・安田優・石本哲子・斎藤安以子・坂本輝世・寺西雅之・幸重美津子（編著）(2013). 『文学  
教材実践ハンドブック：英語教育を活性化する』 東京：英宝社.
- Bauer, L. & Trudgill, P. (Eds.) (1998). *Language myths*. London: Penguin.
- Burton, S. (2016). An overview of English-language literature study in Japan. *Lit Matters: The Liberlit Journal of  
Teaching Literature*. Retrieved from <http://www.liberlit.com/new/>
- Carter, R. (2010). Issues in pedagogical stylistics: A coda. *Language and literature*, 19(1), 115-121.
- Carter, R. & Long, M. N. (1991). *Teaching literature*. Harlow, UK: Longman.
- Hess, N. (2006). The short story: Integrating language skills through the parallel life approach. In A. Paran (Ed.),  
*Literature in language teaching and learning* (pp. 27-43). Alexandria, VA: TESOL.
- Hirvela, A. (1989). Five bad reasons why language teachers avoid literature. *British Journal of Language Teaching*,  
27, 127-132.
- Hirvela, A. (1990). ESP and literature: A reassessment. *English for Specific Purposes*, 9, 237-252.
- Kelly, R. K. & Krishnan, L. A. (1995). “Fiction talk” in the ESP classroom. *English for Specific Purposes*, 14(1),  
77-86.
- Paran, A. (2006). The stories of literature and language teaching. In Paran, A. (Ed.), *Literature in language teaching  
and learning* (pp. 1-10). Alexandria, VA: TESOL.
- Paran, A. (2008). The role of literature in instructed foreign language learning and teaching: An evidence-based  
survey. *Language Teaching*, 41(4), 465-496.
- Paran, A. & Robinson, P. (2016). *Literature: Into the classroom*. Oxford: Oxford University Press.
- Saito, Y. (2020). Pedagogical stylistics as a discipline for bridging the gap between literary studies and English  
language teaching in Japan. *Studies in English literature (Regional branches combined issue)*, 12, 129-138.
- Shaw, G. B. (1913/2000). *Pygmalion*. London: Penguin.

Widdowson, H. G. (1975). *Stylistics and the teaching of literature*. Harlow, UK. Longman.

Widdowson, H. G. (1983). *Learning purpose and language use*. Oxford: Oxford University Press.

## Appendix

設問 1	始めに、現在の所属をお答えください。
設問 2	英語能力を示す資格・検定試験のスコアがあればお答えください。複数ある方は全て書いてください。(例: TOEFL, TOEIC, IELTS, GTEC, 実用英語技能検定 (英検)、ケンブリッジ英語検定など)
設問 3	始めに、英語で文学作品を読むということについてお聞きします。(文学作品とは、小説(大衆小説を含む)、戯曲、エッセイ、詩、伝記、手紙、歌詞など、説明文でないものを幅広く含むと考えてください。)これまで、英語で文学作品を読んできましたか。英語の授業や学習の中で読んだ経験も含めてください。
設問 4	前問で「文学作品を読んできた」と答えた方は、どんな作品を読んだか書いてください。題名がわからなければ作者の名前でもいいです。
設問 5	英語で文学作品を読むことは重要だと思いますか。
設問 6	英語で文学作品を読むことは「重要だと思う」「まあ重要だと思う」「どちらともいえない」と答えた方は、重要だと思う理由を選択してください(複数回答可)。選択肢のほかに理由がある場合、また、重要でないと思う理由がある方はコメント欄に書いてください。
設問 7	この授業では、 <i>Language Myths</i> を主教材とし、この 3 回のみ <i>Pygmalion/ My Fair Lady</i> を取り入れました。この活動について全体的にどう思いましたか。
設問 8	前問で回答したことの理由を選択してください(複数回答可)。選択肢にない場合はコメント欄に書いてください。
設問 9	3 週目に行った "Writing a sequel" の活動についてどう思いましたか。「自分で sequel を書く」「グループで共有する」「Shaw の書いた sequel を読む」という一連の活動についてどう思ったか、回答を選択し、コメント欄にその理由を書いてください。
設問 10	<i>Language Myths</i> と <i>Pygmalion</i> の 2 つのテキストの違いについて、考えたことを自由に書いてください。
設問 11	この 3 回の授業で使った教材・活動・授業方法などについて、上記に書けなかったことを自由に書いてください。アンケートはこれで終わりです。ご協力ありがとうございました。